

# 大都市近郊におけるオープンガーデンの特徴とその機能

—東京都小平市を事例として—

小池拓矢

首都大学東京大学院生

本研究は、東京都小平市を事例として、大都市近郊のオープンガーデンの特徴と機能を明らかにすることを目的とした。オープンガーデンとは一般的に、個人が所有する庭を公開する活動のことであり、事例地におけるオープンガーデンは、都市からの近接性や鉄道によるアクセス環境のよさを生かして多くの利用者を集めていることがオープンガーデン利用者へのアンケート調査から明らかになった。また、主催者である行政はオープンガーデンを観光資源として位置づけ、利用者の回遊行動の促進を活動目的の一つとしていたが、利用者は行政が発信する情報よりも雑誌やテレビなどのマスメディアによるオープンガーデンの情報を利用するケースが多く、このような情報は特定のガーデンのみに利用者を誘導する傾向があるため、現実の利用者の行動と行政の理想とする行動の間に乖離が生じていることが明らかになった。

キーワード：オープンガーデン、大都市近郊、利用者、マスメディア、小平市

## I はじめに

個人が所有する庭を一般に向けて公開するオープンガーデンが、多くの地域で行われている。イギリスのオープンガーデンは、1927年に設立されたナショナル・ガーデン・スキームという団体によって開催されてきた。日本では、1990年代後半のガーデニングブームのなかで、イギリスでの活動が紹介され、オープンガーデンを開催する市民団体が結成された(相田ほか, 2002)。2000年には、長野県小布施町で行政主導のオープンガーデンが開催され(野中, 2002)、現在ではいくつもの自治体がオープンガーデンを開催している。オープンガーデンは、個人が所有するガーデンを公開するだけで利用者と呼び寄せることができるため、資金的に余裕のない自治体において、貴重な地域資源となる可能性を秘めている。

これまで、オープンガーデンに関して、いくつかの視点から研究がなされてきた。相田・進士(2001)は、横浜市と東京都国分寺市、大阪市にある3カ所の個人庭園をオープンガーデンの先駆的

事例として選出し、これらを分析することによって、日本におけるオープンガーデンの意義と発展の可能性を考察した。野中(2002)は、長野県小布施町のオープンガーデンを対象に、行政主導のオープンガーデンが参加者(所有者)に与える効果や、運営上の課題を明らかにした。野中(2005)は、同じく小布施町のオープンガーデンを対象として、オープンガーデンを訪れる利用者の行動特性を明らかにした。また、平田ほか(2003)は、兵庫県の2地域のオープンガーデンを対象に、産業連関分析によって、オープンガーデンが地域へもたらす経済波及効果の把握を行った。朴・野中(2010)は、全国のオープンガーデンを対象に、活動の契機や期間といった視点から、参加者の意識や行政の支援について明らかにした。

以上に述べたように、オープンガーデンに関する研究は主に造園学や都市計画学を中心に行われてきた。オープンガーデンの変遷に関する研究(相田ほか, 2002)や経済効果に言及したもの(平田ほか, 2003)、ガーデンの所有者の意識に着目したもの(野中, 2002; 三分一ほか, 2007など)など、

いくつかの視点から研究が試みられてきた。しかし、所有者だけでなく利用者や周辺住民がオープンガーデンに対してどのような意識をもっているのか、様々な施設が存在する地域空間の中でオープンガーデンはどのように特徴づけられるのかといった「地域」における人や空間との関わりからオープンガーデンを捉える研究は十分に行われていない。近年、行政が地域振興のためにオープンガーデンを開催する例は増えており、これらを認識することは重要な課題である。そこで、本研究においては利用者の調査を行うことで、地域空間におけるオープンガーデンの特徴と機能を明らかにすることを目的とした。

本研究の対象地域である東京都小平市は、東京都の多摩地域に位置している(図1)。都心からの距離は26kmほどであり、西武新宿線を利用する際の西武新宿駅から小平駅までの所要時間は約30分である。また、小平市の面積は約20.5km<sup>2</sup>、2012年現在の人口は約18万人である。JR 武蔵野

線や西武新宿線などの多数の鉄道路線が通っていることがこの地域の特徴の一つであり、市内には7カ所の鉄道駅が立地している。小平市の主な観光施設は、「小平グリーンロード」と呼ばれる全長約21kmの緑道周辺に集中しており、緑地公園や植物園などの自然環境を利用した施設が多いこともこの地域の特徴である。特に、「小平グリーンロード」の一部であり、江戸時代の優れた水道技術を遺す玉川上水の緑道は、多くの人がウォーキングに訪れる観光資源の一つである(図2)。

## II 小平市におけるオープンガーデンの立地と利用動向

### 1. 「こだいらオープンガーデン」の概要と諸類型

本研究では、小平市のオープンガーデンである「こだいらオープンガーデン」を対象として調査を行った。この活動は2007年から、市の産業振興課内に事務局を置く、小平グリーンロード推進協議会によって運営されている。他の地域で行政によ

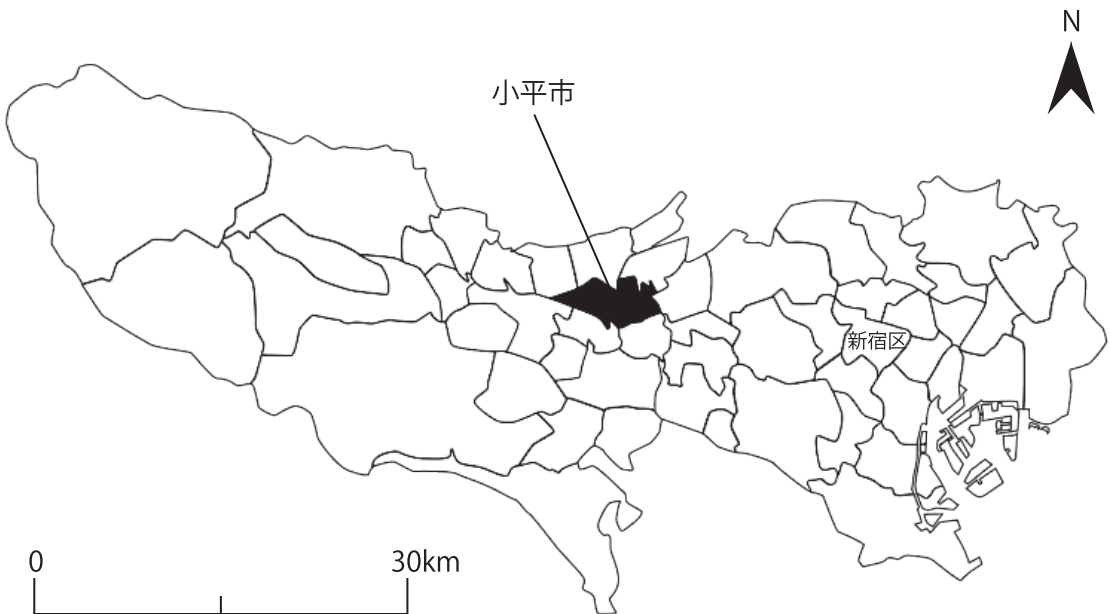


図1 東京都における小平市の位置



図2 玉川上水の緑道  
(2012年6月撮影)

るオープンガーデンが開催されるなか、小平市でも緑の多い土地柄を生かすため、オープンガーデンが行われることになった。活動開始当初は、緑と潤いのあるまちづくりを目指して活動が行われていたが、2008年にはガーデンの登録数を増やすことが目標として掲げられた。2010年になると、活動の認知度の向上と、ガーデン所有者同士の交流による活動への意識の向上が目標となった<sup>1)</sup>。

2012年4月現在、24カ所のオープンガーデンが公開されており、活動の開始当初からその数は少しずつ増加している。また、各種メディアに取り上げられることで、「こだいらオープンガーデン」は次第に観光資源としての役割を期待されるようになった。

「こだいらオープンガーデン」として公開されているガーデンの分布を図3に示した。これによれば、オープンガーデンが「小平グリーンロード」の周辺に多く分布していることが読み取れる。特に、市の北側を通る狭山・境緑道周辺には多くのオープンガーデンが立地していることがわかる。また、野火止用水の緑道と狭山・境緑道と平行するように西武拝島線と西武新宿線がそれぞれ走っているため、オープンガーデンへの駅からのアクセスも良好である(図4)。これらのオープンガーデンの中には、一般住宅のガーデンのほかに、カフェなどの店舗に付属したものや公共の花壇として整備されているものがある。そこで、オープンガーデンを、どのような施設に付属しているのか

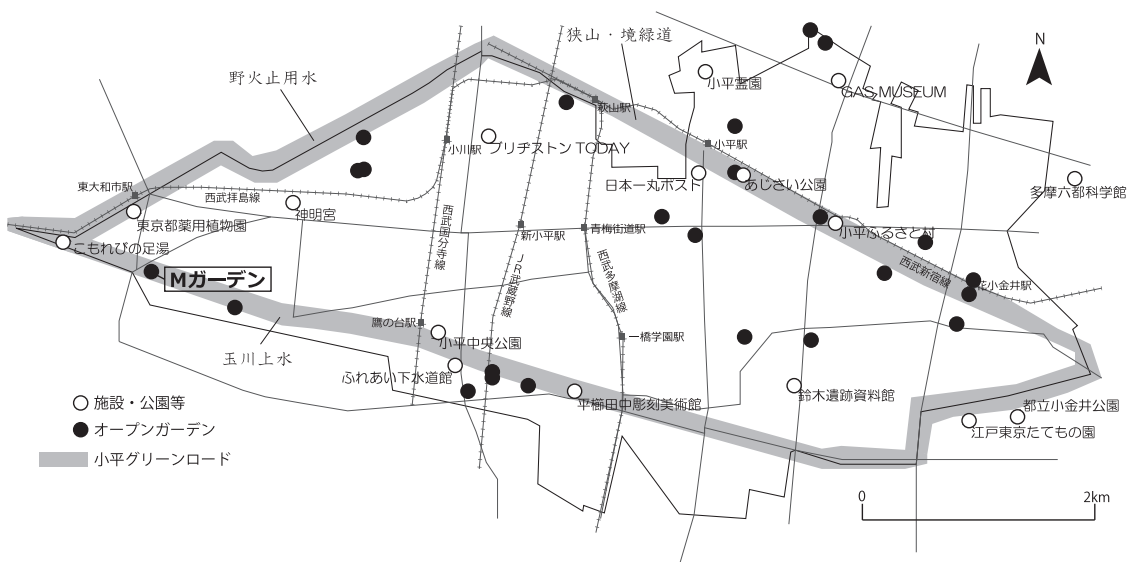


図3 小平市のオープンガーデンと施設・公園等の分布  
(2012年3月発行こだいらオープンガーデンマップと小平市の資料などにより作成)



図4 狭山・境緑道

(2012年6月撮影)

という点と、利用者が住宅敷地内に入れるか否かという点から、敷地内観賞型、敷地外観賞型、店舗併設型、公共施設型の四つに類型化し、整理した(表1)。

小平市におけるオープンガーデンの4類型をまとめた表1によれば、敷地内観賞型は個人が所有する一般住宅のガーデンであり、利用者は敷地内からガーデンを見学することができる(図5)。このタイプのガーデンは利用者が敷地内に入るため、それぞれのガーデンごとで差はあるが、100m<sup>2</sup>程度の比較的広い面積をもっているのが特徴である。ガーデンによっては、所有者の好意に

よって数脚のベンチやテーブルなどが設置されている場合もあり、利用者の休憩・交流の場となっている。

次に、敷地外観賞型は一般住宅のガーデンである点は敷地内観賞型と同じだが、利用者は敷地の外からガーデンを見学しなければならない点が異なっている(図6)。道路上から住居の垣根越しにガーデンを見学するタイプと、植物の入ったバスケットで装飾された住居の外壁等を見学するタイプとがあるが、利用者が敷地内に入れないため、プライベートガーデンとほとんど変わらない性格を有している。



図5 敷地内観賞型オープンガーデン

(2011年5月撮影)

表1 「こだいらオープンガーデン」の4類型

類 型	数	形 態
敷地内観賞型	8	一般住宅のガーデン
		敷地内に入って見学ができる
敷地外観賞型	6	一般住宅のガーデン
		敷地外からの見学となる
店舗併設型	4	カフェなどに付随したガーデン
公共施設型	6	道路脇の花壇や広場

ほとんどのオープンガーデンが通年、もしくは冬を除いた期間ガーデンを公開している。

(2012年3月発行こだいらオープンガーデンマップにより作成)



図6 敷地外観賞型オープンガーデン

(2012年3月発行こだいらオープンガーデンマップより)

店舗併設型はカフェや料亭などの商業店舗に付設されたガーデンである(図7)。店舗を利用しなくともガーデンの見学が可能である。「こだいらオープンガーデン」には、店舗併設型としてカフェのガーデンが2カ所、摘み取り農園が1カ所、料亭に付設された日本庭園風のガーデンが1カ所ある。ガーデンの手入れは基本的に店主が行っているが、一部では造園業者が行っているものもある。

最後に、公共施設型は道路脇の花壇や広場であり、それらのほとんどが駅前や緑道沿いに分布している(図8)。地元の園芸組合やボランティアな



図7 店舗併設型オープンガーデン  
(2011年4月撮影)



図8 公共施設型オープンガーデン  
(2011年3月撮影)

どによって手入れがなされているが、その性格は公共の花壇とほとんど変わらないため、現在は便宜的にオープンガーデンとして登録されているにすぎない。

本研究では、敷地内観賞型の1カ所のオープンガーデン(以下、Mガーデン)において、利用者へのアンケート調査を行った(図9、図10)。敷地内観賞型は、「こだいらオープンガーデン」において最も数が多く、プライベートガーデンとの差異が明瞭なため、典型的なオープンガーデンの様相を呈しているといえる。Mガーデンは玉川上水の背後に位置した、広さ約1,000m<sup>2</sup>の通年公開のオープンガーデンである。各種メディアにしばしば取り上げられており、比較的知名度の高いオープンガーデンであるため、「こだいらオープンガーデン」を訪れる人の多くがMガーデンを利用している。そこで、Mガーデンを起点とした利用者の属性や行動を把握するために、2012年の春季から夏季にかけてアンケート調査を実施した<sup>2)</sup>。

## 2. Mガーデンの利用実態

アンケート調査では、140組からの回答を得た。調査によると、Mガーデンの利用者は女性が多く、男性の約3倍であった。年齢に関しては50代



図9 Mガーデンの景観  
(2012年6月撮影)



図10 M ガーデンの配置図

草花と記載されている場所には、季節によって主にカモミールやヒマワリなどが咲いているほか、こぼれ種から芽を出した何種類もの植物がガーデンを覆っている。また、2008年にオープンガーデンの敷地内に、所有者の友人が営むうどん・そば店がオープンした。  
(現地調査により作成)

以上の高齢の利用者が多く、60代が全体の利用者のうちの約30%を占めていた(表2)。M ガーデンの情報をどこで入手したかという設問に対しては、64組の利用者が家族・知人からと回答し、これに次いで看板(17組)、新聞・雑誌(15組)、テ

レビ(14組)の情報を利用する人が多かった(表3)。また、利用者の居住地は小平市内、および小平市を除く東京都内が多かったが、神奈川県や埼玉県からの利用者もみられた。図11は利用者の居住地と利用交通機関を示したものである。これによれば、M ガーデンから半径10km 圏内に居住地をもつ利用者のうち、約40%が自家用車でM ガーデンを訪れていた。これに対して、10km 圏

表2 利用者の性別と年齢

	男性	女性	不明・無回答	計
10代未満	0	1	0	1
10代	0	1	0	1
20代	4	3	0	7
30代	1	11	0	12
40代	8	16	0	24
50代	12	49	0	61
60代	19	90	0	109
70代	20	46	0	66
80代以上	10	2	0	12
不明・無回答	0	13	39	52
計	74	232	39	345

アンケート回答者の同伴者の年齢・性別についても調査したため、サンプル数が345人になっている。

(アンケート調査により作成)

表3 利用者のM ガーデンの情報入手先

情報入手先	
家族・知人	64
看板	17
新聞・雑誌	15
テレビ	14
事前には入手していない	8
インターネット	5
小平市のパンフレット・情報誌	5
その他	7
不明・無回答	5
計	140

(アンケート調査により作成)

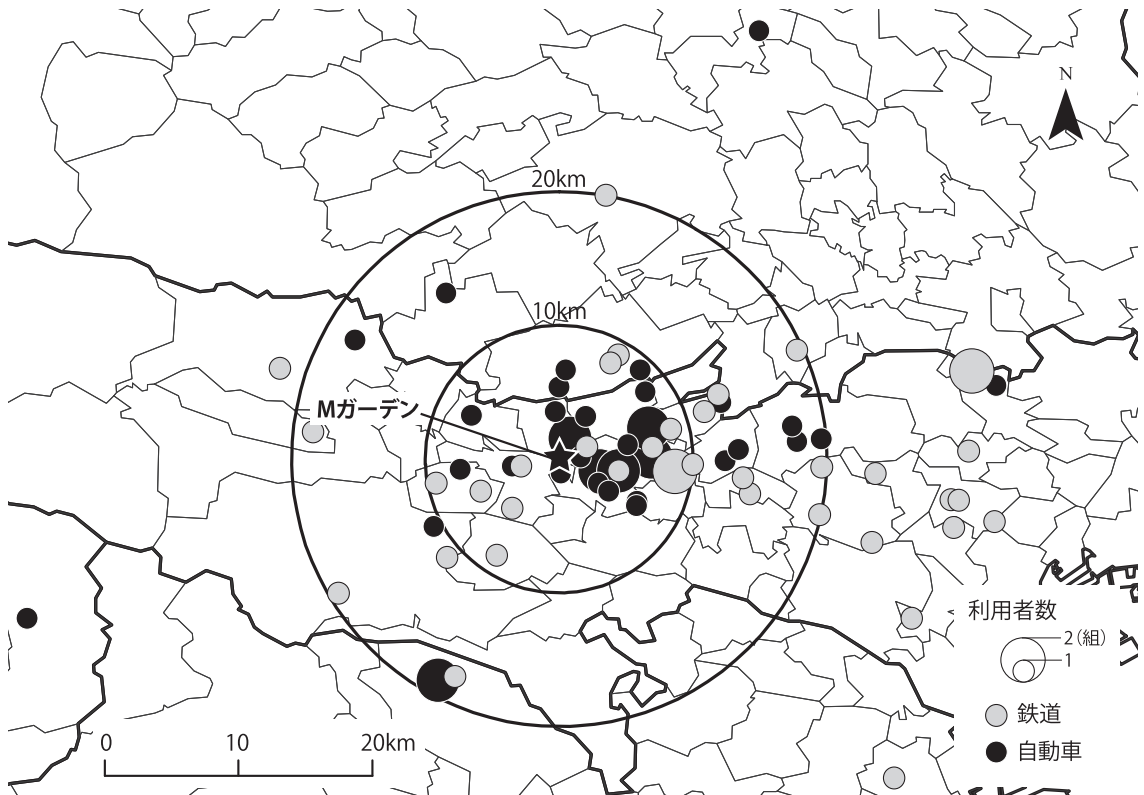


図11 M ガーデン利用者の居住地と利用交通機関

(アンケート調査により作成)

外に居住地をもつ利用者の約60%が鉄道を利用していた。

以上のように、典型的な利用者は高齢の女性であり、それらは家族・知人の口コミ情報をもとにM ガーデンを訪れている傾向が読み取れる。利用者の居住地は広範囲にわたるが、近隣からは自家用車、遠方からは鉄道を利用する傾向が強かった。都心からの鉄道によるアクセスが良好なことは「こだいらオープンガーデン」の特徴であり、このことは、自動車免許を取得していない、都心に住む女性の高齢者が、友人同士でオープンガーデンを訪れる要因になっている<sup>3)</sup>。そして、M ガーデンは単独でテレビや雑誌に取り上げられることが多く、約1,000m<sup>2</sup>のガーデンは敷地内観賞型の

ものとして最も広いため、他のオープンガーデンに比べて特に集客力の高いガーデンとなっている。そのため本研究では、「こだいらオープンガーデン」の多くの利用者が、M ガーデンを訪れると仮定して以下の議論を進めることにする。

### Ⅲ 小平市におけるオープンガーデンと他の観光資源との関係性

アンケート調査では、M ガーデンの利用者に、当日に訪れたもしくは訪れる予定の場所も回答してもらった。回答方法は複数選択式とし、小平市の観光ガイドマップに記載されているものを参考として、主な観光施設に個々のオープンガーデンを加えた36項目の選択肢を用意した。61組から

有効回答を得た。

M ガーデン利用者が M ガーデン以外に訪れた小平市内の施設（一部、市外の施設を含む）を図12に示した。これによれば、利用者は M ガーデンの周辺と小平市南部を通っている玉川上水の緑道沿いの施設を訪れる傾向が強いことがわかる。最も多くの利用者が訪れた施設は、M ガーデンと最寄駅との間に位置する東京都薬用植物園であり、19組の利用者が訪れている。さらに、M ガーデンからは離れた場所に位置しているのにもかかわらず、玉川上水に隣接する都立小金井公園と江戸東京たてもの園は、それぞれ14組、12組の利用者が訪れている。これとは対照的に、小平市北部の小平駅周辺の施設を訪れた利用者は、最も多い施設でも6組であり、南部の施設と比較すると少なかった。特に、鉄道での M ガーデンの利用者はほとんど北部の施設を訪れていなかったため、小平市内の駅から駅への鉄道による回遊行動が起きていないといえる。また、M ガーデン以外のオープンガーデンを1カ所でも訪れた利用者は

19組存在した。1人でも利用者が訪れたオープンガーデンは9カ所あったが、そのうち5カ所は敷地内観賞型、3カ所は店舗併設型、1カ所は敷地外観賞型であった。

M ガーデンの利用者は以上のような施設を訪れていることが調査から判明したが、利用者の約3割を占める20組は、M ガーデン以外の他の施設をどこも訪れていなかった。このような行動をとる要因の一つとして、利用者がマスメディアの情報に基づいて M ガーデンを訪れていたことが挙げられる。なぜなら、マスメディアは M ガーデンのみを取り上げて情報を発信しており、周辺の施設や小平市の特徴といった情報は多くの場合、除外されるためである。ただし、マスメディアの種類によってその傾向には差があり、例えば、小平市を含めた5市<sup>4)</sup>を対象とする地域情報誌「ほのほのマイタウン」では、2008年4月発行の第131号でオープンガーデンの特集をしており、「こだいらオープンガーデン」のうち4カ所が紹介されている。さらに、東京都公園協会によって2012年

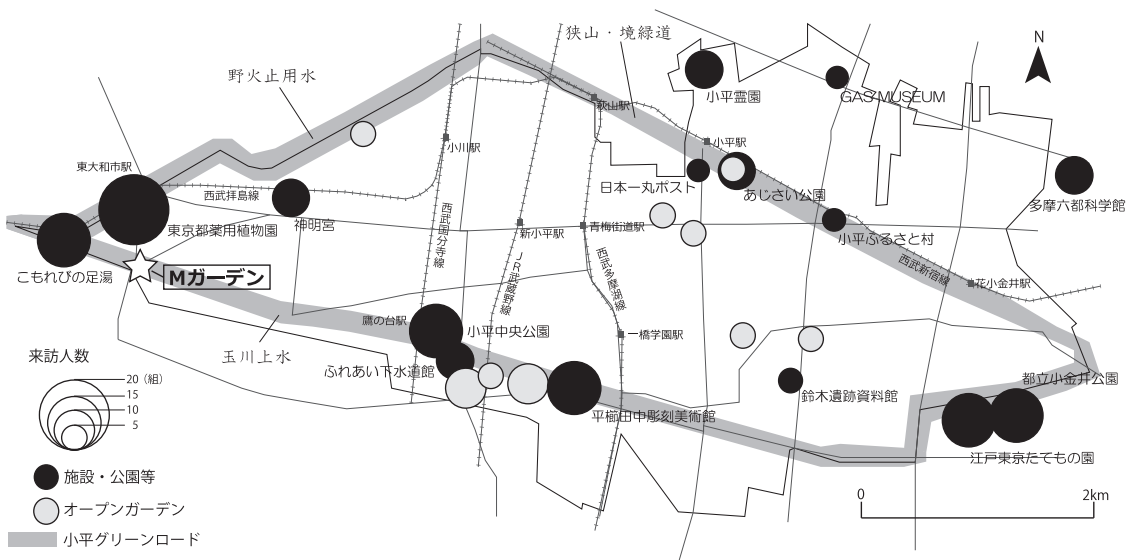


図12 M ガーデン利用者の来訪施設

(アンケート調査により作成)



3月に発行された「緑と水のひろば第67号」では、「こだいらオープンガーデン」が見開き1ページで特集されており、5カ所のオープンガーデンが紹介されている。これらの雑誌は、オープンガーデンのマップが公共施設やホームページから手に入ることを記載しており、上述した情報の除外は比較的少なくなっている。これに対して、雑誌よりも不特定多数の人の目に触れると考えられるテレビ番組については、情報の除外の傾向が顕著である。その一例として、2011年5月13日にNHKで放送された番組「こんにちはいっと6けん」のオープンガーデンの特集では、Mガーデンが約4分間にわたって紹介されたが、小平市の情報としては玉川上水が紹介されただけで、「こだいらオープンガーデン」の活動に関する言及は一切なかった。結果として、利用者はMガーデン以外を観光や散策の目的地として認識できないため、行政が望むような回遊行動が起きにくくなっている<sup>5)</sup>。

「こだいらオープンガーデン」を含めた小平市に関する情報やマップは、小平市のウェブサイトや市内の各公共施設などで手に入れることができるが、アンケート調査から、これらを利用する人は少ないことが明らかになった。結果的に、利用者にMガーデン以外のオープンガーデンが認識されていないことが、現状の利用者の行動における最も深刻な問題である。小平市の観光マップには、いくつかのオープンガーデンが観光スポットとして紹介されており、行政がオープンガーデンを観光資源として位置づけていることは明らかである。しかし、現状においては、利用者が市内を回遊する上での立ち寄り場所の一つという、行政が理想とするかたちでのオープンガーデンの利用がなされていない。以下では、調査から明らかになった、行政がオープンガーデンを有効に活用する上で解決すべき課題について検討する。

#### IV 「こだいらオープンガーデン」の課題

「こだいらオープンガーデン」における第一の課題は現地情報の不足である。行政はマップやウェブサイトを利用して「こだいらオープンガーデン」の情報を発信していたが、これらの情報を参考にした利用者は少なく、多くは口コミやメディアの情報をもとにMガーデンを訪れていた。ただし、メディアによる情報はMガーデンのみに焦点を当てている場合が多く、他の観光施設やオープンガーデンについて認識しないままMガーデンを訪れる利用者が多数いた。

そのため、「こだいらオープンガーデン」を利用者に認識させるために必要となるのが、現地での案内板やマップなどによる情報である。しかし、個々のオープンガーデンには、観光施設や他のオープンガーデンに関する案内板がほとんど設置されていない。また、それぞれの観光施設でもオープンガーデンに関する案内はなされていない。

2011年に、公共施設型を除いた「こだいらオープンガーデン」の所有者15名に対して聞き取り調査を行った。行政のオープンガーデンの活動に関する意見として、「宣伝が足りないので、小平在住の人でも知らない人が多い」、「市外へのアピールを鉄道会社などと交渉して行えばいいのではないか」というようなオープンガーデンの地域内外への宣伝の必要性に言及する所有者が4名存在した。また、オープンガーデンの数を増やしたいという所有者が2名いた。よって、所有者の中にも、オープンガーデンによる観光振興を望む人は存在するが、それはほとんど行政の役割として認識されているため、所有者による積極的な宣伝活動は行われていないのが現状である。また、オープンガーデンはあくまで個人所有の敷地であるため、行政が案内板の設置などを指示するのは難しい側

面もある。

次に、第二の課題は、類型ごとにオープンガーデンの機能に差異が存在することである。利用者が享受できるオープンガーデンの主な機能は、「観賞」、「休憩」、「交流」の三つに大別できる。ガーデンの草花や樹木を見る「観賞」、ガーデン内に設置されたベンチなどでの「休憩」、ガーデンの所有者と利用者、または利用者同士での「交流」、これらの機能がオープンガーデンとプライベートガーデンとの違いを生みだしている。

オープンガーデンの諸類型とプライベートガーデン、および公共のガーデンに関して、上記の三つの機能の存在状況を表4にそれぞれ示した。これによれば、敷地内観賞型は三つの機能をすべて備えており、基本的なオープンガーデンといえる。また、店舗併設型も所有者が不在の場合を除いて、すべての機能がそろっている。しかし、敷地外観賞型のガーデンには「休憩」機能が備わっておらず、さらに「休憩」機能がないために人々が滞留する空間が生まれにくく、「交流」機能も弱くなっている。また、公共施設型のオープンガーデンの機能は一般的な公共のガーデンと変わらないものになっている。

三つの機能の中で、特に、「交流」機能はガーデンの所有者が利用者に情報を提供することなどから、利用者の回遊行動の促進に大きく寄与している。Mガーデンの調査時には、所有者が利用者に他のオープンガーデンを訪問することを促している様子がみられた。このように所有者と利用者の交流のなかで提供される生の声の情報は、オープンガーデンに関心のある利用者の興味を強く引くものとなっている。

また、Mガーデンの所有者がテレビに出演したり、雑誌に掲載されたりすることもあり、それらを見てガーデンオーナーに会いに来たという利用者も存在した。つまり、「交流」は利用者のオー

表4 存在形態別のガーデンの機能

	観賞	休憩	交流
敷地内観賞型	○	○	○
敷地外観賞型	○	×	△
店舗併設型	○	○	△
公共施設型	○	×	×
プライベートガーデン	△	×	×
公共のガーデン	○	×	×

○：機能あり

△：機能あり(ただし一部制限)

×：機能なし

(現地調査および小平市の資料により作成)

ンガーデン来訪の主目的となる場合もあり、最初は植物を観賞しにきた利用者が、次は所有者に会うためにガーデンを訪れ、リピーターとして定着するケースも少なくない<sup>6)</sup>。ところが、敷地外観賞型には「休憩」機能がなく、公共施設型は「観賞」以外の機能を有していないため、これらのオープンガーデンには利用者がほとんど訪れていなかった。

日本で初めて行政主導でオープンガーデンが行われた長野県小布施町にも、敷地外観賞型や公共施設型のオープンガーデンは存在する。しかし、小布施町では100カ所以上のガーデンが公開されている<sup>7)</sup>のに対して、「こだいらオープンガーデン」のガーデン数は24カ所にすぎない。そしてそのうちの12カ所、つまり半分が敷地外観賞型、もしくは公共施設型である。このように、オープンガーデンの特徴といえる機能を有していないガーデンが半数を占めていることを主催者である行政は意識する必要がある。利用者がすべてのオープンガーデンを巡りたくなるようなイベントの開催を行うなどして、地域内の利用者の回遊行動を促進することが行政に求められる。

## V 「こだいらオープンガーデン」の特徴

### —むすびにかえて—

大都市近郊のオープンガーデンである「こだいらオープンガーデン」は、多様な地域から利用者が訪れていることで特徴づけられる。相田・進士(2001)は、新聞や雑誌によって来訪者の居住地の範囲が拡大した結果、オープンガーデンの開催が地域活動の枠を超える可能性があるとして指摘しているが、まさに「こだいらオープンガーデン」は広範囲から集客をする観光資源として機能していた。また、長野県小布施町のオープンガーデンの利用者は、ほとんどが自家用車や団体バスでガーデンを訪れている(野中, 2005)が、Mガーデンを訪れる人のなかには、鉄道を利用する人が多数いた。これは、大都市近郊に位置し、鉄道によるアクセスが容易であるという特徴を反映していた。

小平市の地域的な特徴として、豊かな自然資源が存在すること、玉川上水の緑道に代表されるように、来訪者が安全・快適に移動できる歩道が整備されていること、市内に多数の鉄道駅が存在していることなどが挙げられ、これらの特徴は来訪者の回遊行動を促進する上で有利な条件になる。「小平グリーンロード」のような自然空間は都市住民の貴重な余暇空間でもあり、特に玉川上水は現状においても一定数の利用者を緑道沿いの施設へ誘導する道として機能している。また、鉄道駅が複数あることで、利用者は下車駅に必ずしも戻ってくる必要がないため、広範囲の行動が可能となる。

本研究においては、「こだいらオープンガーデン」の特徴と利用者の回遊行動を促進する上での課題を述べてきた。ただし、本来プライベートであるはずの空間を公開するというオープンガーデンの性格上、利用者が増加することで、利用者と

地域住民の間で衝突が起こったり、ガーデン所有者の家族が精神的に疲労してしまうケースがあることには留意しなければならない。「こだいらオープンガーデン」においては、多くの所有者が利用者にガーデンを見られることを歓迎しているが、一部の所有者は不安を感じており<sup>8)</sup>、オープンガーデンを持続的に行っていくためには、地域住民や所有者の家族を含めた各主体間で合意形成を行うとともに、私的な空間が公共性をもつことに伴う弊害について注意する必要がある。

現在では、他の大都市近郊地域、例えば小平市に隣接した西東京市や羽村市においてもオープンガーデンが行われている。このような状況において、主催者である行政は、オープンガーデンの所有者やさまざまな観光施設、および交通機関と協力して、利用者が行動しやすい環境をつくる必要がある。また、オープンガーデンに関連したイベントを他地域と協働して開催することも可能である。このように、オープンガーデンだけでなく、他の地域資源、時には他の自治体とも連携しながら活動を展開することが、行政がオープンガーデンを主導する意義であるといえる。本研究では、小平市内という比較的微小なスケールでの利用者の行動に言及したが、今後は広域的な観光スポットとオープンガーデンの関連性について、マクロスケールでの研究を行うことも必要である。

### 【付記】

調査にご協力いただいた小平市役所の皆様や、オープンガーデンの所有者の方々、各観光施設の担当者、アンケートに回答して頂いた利用者の皆様にお礼申し上げます。本稿の作成にあたっては、首都大学東京都市環境科学研究科の菊地俊夫先生より終始ご指導を賜りました。以上、記して深謝いたします。なお、本論文は日本地理学会2012年度秋季学術大会(神戸大学)における発表を加筆・修正したものである。

## 注

- 1) それぞれ, 「小平市グリーンロード推進協議会 だより vol.21」, 「小平市グリーンロード推進協議会だより vol.25」, 「小平市グリーンロード推進協議会だより vol.29」による。
- 2) 筆者がアンケート票を M ガーデンの所有者に預け, 所有者が M ガーデンの利用者に対してアンケート票を配布した。後日, 所有者が保管していた記入済みのアンケート票を筆者が回収した。
- 3) 2010年における東京都の女性の運転免許保有率は, 50代が63%, 60代が42%, 70代が12%である。なお, 算出には, 分子として「運転免許統計(平成22年版)」, 分母として「平成22年国勢調査」を用いた。
- 4) 小平市・東久留米市・東村山市・清瀬市・西東京市の5市。
- 5) M ガーデン以外の他の施設をどこも訪れていなかった20組の情報入手先の内訳は, 家族・知人11組, 新聞・雑誌4組, 看板2組, テレビ2組, 事前には入手していない1組であった。
- 6) アンケート調査では, 回答者の約4割がリピーターであった。
- 7) 小布施町のウェブサイト  
(<http://www.town.obuse.nagano.jp/site/opengarden/garden3.html>) による(最終閲覧日2013年5月24日)。
- 8) 2011年に行った所有者への聞き取り調査では, 15名中8名が不特定の人にガーデンを見られることについて肯定的意見をもっていたが, 2名は「家の様子が見られているようで不安な気持ちとなる」などの否定的意見をもっていた。

## 文献

- 相田 明・進士五十八(2001):先駆的事例を通じた我が国におけるオープンガーデンの意義. 東京農大農学集報, **46**, 154-165.
- 相田 明・鈴木 誠・進士五十八(2002):英国ナショナル・ガーデン・スキームによるオープンガーデンの発祥と活動. ランドスケープ研究, **65**, 393-396.
- 三分一淳・湯沢 昭・熊野 稔(2007):オープンガーデン実施者の開放性に関する意識構造の検討. ランドスケープ研究, **70**, 391-396.
- 野中勝利(2002):長野県小布施町におけるオープンガーデンの特徴と課題. ランドスケープ研究, **65**, 805-810.
- 野中勝利(2005):日常的公開のオープンガーデンにおける観賞者の行動特性-小布施オープンガーデンを事例として-. 都市計画論文集, **40**, 847-852.
- 朴 恵恩・野中勝利(2010):オープンガーデン活動におけるきっかけと期間を視点とした活動実態からみた継続性. 日本建築学会計画系論文集, **75**, 427-435.
- 平田富士男・橋 俊光・望月 昭(2003):わが国におけるオープンガーデンの地域経済への波及効果量の把握に関する研究. ランドスケープ研究, **66**, 779-782.